■公民館活動
■生涯学習
■文化振興
■学校
■スポーツ

～地域で学び、活動する皆さんを応援します～

北秋田市教育委員会

学びの広場

いつもと違った視点で再発見！鷹巣まち歩き

～コムコム定期講座「グッドライフ講座」～

コムコム定期講座「グッドライフ講座」が、7月18日に市民ふれあいプラザで行われ、受講者52名が参加し、鷹巣のまち歩きをしました。

この日は、まちづくりファシリテーターとして活躍している平元美沙緒さんを講師に迎え、商店街の魅力を見付ける方法を学びました。まち歩きをしたあと、受講者はグループに分かれて宣伝ポスターを作成し、「いつもと違う人とまちを歩いたがすぐに打ち解け、新たな魅力が発見できた」、「コムコムから歩いていける所に楽しいものがたくさんあった」などと発表し合いました。

▲まちを歩いて楽しいものを探す参加者

ミュージック・ケアでコロナ禍を乗り切ろう

～高鷹大学全体講座～

高鷹大学の活動が7月からスタートし、8月5日に全体講座が開催され、受講生90人が参加しました。

今年は新型コロナウイルス感染症予防のため入学式を開催することができず、この講座が全体での初めての活動となりました。

この日は市の保健師を講師に迎え、誰でも、どこでも、いつでも楽しめる音楽療法「ミュージック・ケア」を行い、コロナ禍を元気に乗り切ろうと音楽に合わせて体を動かし、受講生同士で交流しながら、心身ともに健康に過ごすコツを学びました。

▲座りながら音楽に合わせ体を動かす受講者

夏休みの思い出作りを

～森吉公民館「夏休みプラス・ワン講座」～

森吉公民館ファミリー講座「夏休みプラス・ワン講座」が、夏休み初日となる8月1日に行われました。

午前中の第1部では、親子で紙ひこうき作りに挑戦し、10種の紙ひこうきから好きなものを選んで丁寧に折り、紙ひこうき飛ばしを楽しみました。また、野菜ソムリエの長谷川早苗さんを講師に迎え、夏野菜や果物等を使った数種類のスムージー作りを体験しました。第2部の天体観測会は、曇り空のため館内で星空教室を行いました。講座の最後に館長から「短い夏休みですが、夏休みにしかできないことに挑戦してください」と話がありました。

▲紙ひこうき作りや実際に飛ばしてみる受講者

温故知新 Vol.3

赤利又から明利又へ

平成27年に行われた「おさるべ元気くらぶ講座」では、七日市地区の歴史について、日本近世史を専門とする栗原健一先生（立正大学文学部講師）を講師に迎えた。質疑応答の際に、会場の参加者から質問があった。「七日市地区の明利又城は、赤利又か明利又のどちらの表記が妥当か？」先生は「赤利又が良いでしょう」と回答された。

▲おさるべ元気くらぶ講座の様子

今回は、どうしてそのような回答をされたのかと、七日市地区の赤利又がいつから明利又と書かれるようになったのか考えてみたい。

明利又には市指定文化財「伝明利又城と浅利氏墓石群」が残されている。この墓石の子孫と考えられる戦国時代の武将で浅利氏中興の祖「十狐村城主浅利与一則頼」（生不明～没1550）は、一時期「赤利又」に拠っていたとされる。この口承を記述した一人が、江戸時代後期の菅江真澄である。菅江は旅行家で県内の歴史・風習など記録を残しており、文化二（1805）年に「浅利の一族がここに住んでから、浅利やまたということをなまって、あかりやまたということだなど」（「みかべのよろひ」内田武志訳・東洋文庫・平凡社）と記録した。

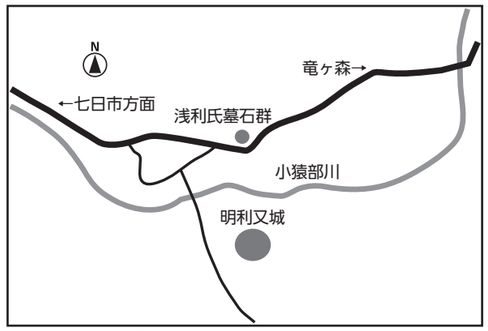
同じ頃に長崎七左衛門は、「一沢歳代記」の「小猿部本郷枝郷御書上帳」に、「本郷七日市（ナヌカイチ）村」、「支郷赤利又（アカリマタ）村」と記録した。菅江の記したあかりやまたは、赤利又と考えていいだろう。

では、赤利又はいつから使われているのだろうか。18世紀末の秋田の村の歴史等をまとめた本格的な地誌「久保田領郡邑記」の著者近藤甫寛は、寛政十二（1800）年六月、「郡邑記」執筆のための村々調査のため、七左衛門宅に三泊している。浅利氏居城説のある赤利又城について、話題にならなかったのか。その記述はない。一方、「寛永四（1627）年赤利又村（略）新開御検地帳」という古文書の存在が記録されており、これが現在分かっている赤利又と記されたもっとも古いものだろう。

赤利又は文政七（1824）年まで使われていた。一方、明利又村は寛政三（1791）年の「明り又村　辰之助以下」が最初である。私見ではあるが、菅江があかりやまたと記したあたりから、村民の間で「明」利又を使うような動きがあったのではないかと推測している。

このようなことからも、旧鷹巣町時代に指定された市文化財「伝明利又城」は「伝赤利又（明利又）城」の方が、より歴史的に正しい表記と考える。

永井高道



▲明利又城があったとされる場所

▲菅江真澄が記述した墓碑群